

す。

この他、この時代には、美しい石槍や、工具である片刃打製石斧なども使用していることが、上屋地遺跡A地点の調査などからわかります。

◦角二山遺跡の発見と調査

昭和45年の初夏、大石田町上ノ原地内で、最北職業専修学校を建設するためのブルドーザの整地作業が行われ、細石器が発見されました。工事を一時中止し、調査が行われた結果、多量の細石器や搔器彫器などが出土し、東北地方での細石器文化の内容が、はじめて明らかとなったものです。

角二山の細石器は、肘折バミスと呼ばれる軽石層の直下に発見され、約1万1千年前のものと考えられています。

◦細石器の作り方・使い方

細石器の作り方で、角二山遺跡で使われている方法は、湧別技法とよばれるものです。この方法は、大形の両面加工の尖頭器を作り、それを縦に半割し、スキー状の剝片をとります。そして、残った舟形状の石核から、甲板部分の端から工具で、つぎつぎと細石刃を剝いていく方法です。角二山遺跡では、この作り方を証明する石核、剝片、細石刃が出土しています。

このようにして得られた細石刃は、先端を尖した木や骨の両辺に溝を掘り、埋め込んで、アスファルトなどで固定し、槍、鎌などに使用されました。刃の取替えの可能な組み合わせ道具です。

◦上屋地遺跡A地点の調査

昭和46～48年にかけて上屋地遺跡A地点の調査が、上屋地遺跡B地点の調査に引き続き実施され、片刃打製石斧・尖頭器（槍）などが出土しました。

片刃打製石斧は、高島町洞穴遺跡群のうち、日向洞穴や火箱岩洞穴などから土器を伴って出土し、縄文早創期まで引き継がれる石器です。

土器と弓矢の発明 —縄文文化（新石器文化）のはじまり—

今から約1万年前前後になると、人類は、土器と弓矢を発明しました。土器の発明によって、食物を貯蔵することや煮たきすること

が可能となり、弓矢の発明では、遠くの獲物や飛んでいる鳥をつかまえることが可能となりました。

日本で、最初に土器を作った人々は、ほぼ共通して洞穴や岩陰に住みました。高島町内の洞穴群も、これらの人々の遺跡が密集して発見されています。

◦高島町内の洞穴・岩陰遺跡群

高島町周辺には、たくさんの洞穴、岩陰遺跡群があります。この洞穴や岩陰に、縄文草創期の人々が居住しました。日向洞穴、火箱岩洞穴、尼子岩陰、一ノ沢岩陰、神立沢洞穴、さらに大立洞穴などです。これらからは、細い粘土紐を貼り付けたような隆線文や爪形文、押圧縄文などの土器が出ています。石器も、槍、石鏃、石斧などが出土しています。日向洞穴からは、イノシシなどの動物の骨や水鳥などの骨もたくさん発見されました。

大立洞穴の発掘調査

本館で、昭和50～52年の3カ年間、高島町大立洞穴の発掘調査を行い、多くの成果をあげることができました。

洞穴からは、平安時代、古墳時代、弥生時代、そして縄文時代の各時期の土器が出土し、断続的に長い間、人類が居住しつづけたことが明らかとなりました。

とくに、発掘区の下層からは、縄文草創期の遺物が多量に出土し、花粉分析もあわせて行った結果は、現在よりもやや気候は冷涼で、積雪も少なかったと考えられています。

また、洞穴の現在の形は、縄文前期頃に形造られ、縄文草創期の洞穴は、現在のテラス傾斜部あたりにあることが、落石状況や土器の出土状況から考えられました。

この他、出土遺物として、縄文時代の石鏃をはじめとするいろいろな石器が見られます。

昭和53年度 特別展

やまがたの 旧石器文化から新石器文化へ

—大立洞穴遺跡の調査から—

昭和53年10月7日(土)～12月3日(日)

山形県立博物館

開催にあたって

山形県内には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡がたくさん存在しています。本館でも、昭和50～52年度の3カ年間、高島町の大立洞穴遺跡の発掘調査を実施し、日本最古の隆線文土器群をはじめ、各時期の縄文土器を発見しております。

今回の特別展は、大立洞穴遺跡をはじめ、山形県内の旧石器時代や縄文時代の遺跡からの出土品を中心に展示し、やまがたの旧石器文化から新石器文化へのうつりかわりについて理解を深めていただくために開催するものです。

この機会に、旧石器人や縄文人の文化について、ご理解いただければ幸いです。

☒ 展示解説 ☒

最古の山形 ー前期旧石器文化ー

山形県にはじめて、人類が居住したことが確かめられるのは、今から約4万年前のことです。そのころの石器が、飯豊町上屋地遺跡B地点や、寒河江市明神山遺跡から発見されています。当時の人類は、現在とは異った人々で、ヨーロッパで見つかったネアンデルタール人の仲間と考えられています。日本は、寒冷な最期の氷河（第4氷河期ウルム氷期）でおおわれ、海水面が、今よりも130m～140mも低下し、近海海峡は、陸橋でつながり、日本海は巨大な湖でした。そこを、今は絶滅したナウマン象などの大型獣が、大陸から日本に歩いて渡ってきました。

○上屋地遺跡の発見と調査

昭和42年の夏の終り、飯豊町中津川地区に記録的な大雨が降り、大きな被害を与えました。この水害を調査に訪ずれた山形大学の米地文夫先生は、上屋地で数斤の石器を採集しました。今から約4万年前の上屋地遺跡の発見です。

その後、本館が主体となり、県内の旧石器文化の研究者加藤 稔先生を中心とした調査を行い、多くの前期旧石器を発見しました。

この遺跡は、地質学上の調査から、地すべりによって形成された古中津川湖の湖岸段丘上に生活した旧人の残したものと考えられています。

○最上川流域の前期旧石器遺跡

上屋地遺跡の発見後、最上川流域の寒河江市明神山遺跡からも、前期旧石器が発見されました。

昭和44年、46年の調査では、200点もの石器が出土しています。

○前期旧石器の作り方・使い方

上屋地遺跡B地点や明神山遺跡では、石器を作る方法として、ルヴァロア技法が見られます。この技法は、パリ郊外のルヴァロア遺跡で最初に気づかれた前期旧石器時代の特徴的な石器製作方法です。

ルヴァロア技法で作られた石器は、槍先として主に使用されたものと考えられ、この他の石器では、古代の万能石器と呼ばれるチョッパーは、木を切ったり、骨をわったりするとき使用したといわれ

ます。

花開く旧石器文化 ー後期旧石器文化ー

今から約3万年前になると、現在の人類の直接の祖先である新人が出現します。

この時代から、約1万3千年前頃まで、石刃技法と呼ばれる特徴的な石器を作る技法が発達します。これは、1つの石核（原石を加工したもの）から、連続して縦長の薄い、巾狭い石刃を剥ぐ技法です。後期旧石器文化は、この剥がれた石刃を利用し、さまざまな石器を作りました。この時期の遺跡は、山形県各地で発見され、調査研究がすすめられています。

○陽の目を見なかった旧石器ー大隅遺跡ー

昭和24年の群馬県岩宿遺跡の発見まで、日本には、旧石器文化が存在しないと考えられていました。

しかし、岩宿遺跡発見の直前、山形県内でも、朝日町大隅遺跡が、地元の農民考古学者菅井進氏によって発見され、「縄紋」という雑誌に旧石器の遺跡として報告されていました。残念ながら、地方的な雑誌であり、それを取りあげる研究者が周囲にいなかったため、旧石器文化発見の直接の契機につながりませんでした。

山形県内の旧石器文化研究の本格的な夜明けは、昭和33年の越中山遺跡の発見を待たねばならなかったのです。現在は、庄内地方の越中山遺跡群や、新庄盆地・小国盆地周辺、あるいは寒河江周辺で多くの遺跡が発見され、日本でも調査研究のすすんでいるところとなっています。

○後期旧石器のいろいろ

後期旧石器文化は、いろいろな石器を使用しました。獲物をとるための道具や、解体するための道具、あるいは、木や骨を加工するための道具と用途によって形をかえて作っています。ナイフ形石器、彫器、削器、搔器、槍、錐などです。

とくに、ナイフ形石器は、突き刺したり、削ったりする道具で、時期や地方によってさまざまな種類があります。山形県内に見られるのは、柳葉形の杉久保型ナイフや巾広の東山型ナイフ、あるいは両者を合わせた形などです。この他に、庄内地方の越中山K遺跡からは、瀬戸内地方に分布する国府型ナイフが見つかっています。

○後期旧石器と原石

旧石器人は、その地方に産する原石をたくみに選んで石器を製作しました。関西地方から九州地方ではサヌカイト、関東地方では黒曜石やチャート、中部地方から東北地方では硬質頁岩、北海道では黒曜石という具合にです。

山形県内の石器の大部分は、硬質頁岩を利用していますが、まれに、玉ずいや黒曜石を使用していることもあります。どのような選択原理によって玉ずいや黒曜石を、一部利用しているのかは、良くわかりません。

○後期旧石器時代の動植物と食料

岩手県花泉町から、約2万年頃と考えられる動物化石がたくさん見つかり、当時住んでいた動物がわかりました。その頃の日本には、野牛や、オオツノジカ・ヘラジカ・ナウマン象・野ウサギの一種などが生息し、北海道には、マンモス象がすんでいました。山形県内でも、村山市基点などからナウマン象の化石が発見されています。

また、花粉分析の結果から、モミヤブナ、ゴヨウマツ、シラカバなどの、やや寒冷な植物がはえていたことが明らかになっています。山形県にも、針葉樹を中心とした原始林があり、高山植物も普通に見られたものでしょう。

花泉町の化石群は、後期旧石器人の解体した動物の化石化したものと考えられており、当時の人々の食料としたのが、これらの動物群であったのがわかります。

新しい時代の胎動 ー晩期旧石器文化ー

今から約1万3千年前頃になると、長さ3～4cm程度の小さな石器を多用しました。この石器は、細石器とよばれ、一個づつでなく、組み合せて、槍、鎌などに使用したと考えられています。

細石器は、山形県内では、大石田町角二山遺跡で多量に発見されました。角二山の細石器は、北海道で盛んに使用された湧別技法とよばれる方法で石器を作っています。この時代には、すでに津軽海峡は成立しており、丸木舟で、北海道と本州の交流があったものでしょう。細石器の文化ごろの本州では、土器を使用していませんが、九州では、土器と一緒に使っています。この意味で、細石器文化は、旧石器文化から新石器文化（縄文文化）への過渡期の文化といえま